(英和語羅馬字對譯挿入)

A translation to the English from the Japanese contained.

女學叢誌

驛遞局認可　明治十九年一月十六日　毎土曜日發兌　第五號

此の繪の說明ハ本紙中に在り

The Engraving illustrated in another page.

東京々橋區南鍋町貳丁目拾壹番地　發行所　積文舎

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學叢誌第五號目次

●女子に猛省を促かす●商客〔承前〕●御茶坊主●西洋の謎●數學のプッザルス●和英語羅馬字對譯●司馬懿の妻●細川忠興の夫人●表壽傳〔五〕●佛國のマリアスミッスの傳●榊の辨●娘ハ息女の稱ニ非ず●餅はかちんと云ふ事●川〻みの記●水引かたわあに結ぶ●啼鳥〔承前〕群芳詞苑●近松門左衛門の美人の賛●大根●風流●堯舜ハ儒者か●わて字●家を圓く治める桶屋にての狂歌●世代の字●混布を祝物とする事●庭は石燈籠●書法一言●飜譯の詩●ま〻●靜流の薙刀●定家卿十二月花鳥の歌●つれ〲草講義●内外雜報●諸廣告

明治十九年一月十六日

明治十九年 女學叢誌毎土曜日發兌表

一月	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
二月	六日	十三日	二十日	廿七日	
三月	六日	十三日	二十日	廿七日	
四月	三日	十日	十七日	廿四日	
五月	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
六月	五日	十二日	十九日	廿六日	
七月	三日	十日	十七日	廿四日	卅一日
八月	七日	十四日	廿一日	廿八日	
九月	四日	十一日	十八日	廿五日	
十月	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
十一月	六日	十三日	二十日	廿七日	
十二月	四日	十一日	十八日	廿五日	

廣告料定則

一行二十七字詰	自一行至十行	自十一行至二十行	自二十一行至三十行	自三十一行至五十行
壹回分	八錢	七錢	六錢	五錢五厘
二回分	七錢	六錢五厘	五錢五厘	五錢
三回分	六錢五厘	六錢	五錢	四錢五厘
四回分	五錢	四錢五厘	四錢	三錢五厘

本誌代價表

壹冊	正價金四錢	此郵税壹錢
拾冊	同金三拾八錢	同拾錢
二拾冊	同金七拾五錢	同二拾錢
三拾冊	同金壹圓拾錢	同三拾錢
四拾冊	同金壹圓四拾錢	同四拾錢
五拾冊	同金壹圓七拾錢	同五拾錢

但シ東京十五區內郵税不申請

本舍ハ御注文有之と雖とも前金御送附無之間ハ叢誌配達不仕事に內規相定候に付御注文の節ハ必ず代價郵税共郵便爲替又ハ通運便にて御送附わらんとを希ふ〇郵券代用ハ御斷り申上候乍一郵便切手を以て代價御送附の節ハ壹錢切手にて一割增を乞
郵便爲替ハ芝區芝口郵便局へ御振込之其爲替券を本舍へ御送附可被下候

但し東京十五區內ハ御斷り無之間ハ引續き配達仕候

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◎女學雜譚

○女子に猛省を促がす（承前）　富春漁父

良人の行跡已に斯の如くなるに至れば其妻女ハ怨恨嫉妬に耐へず鬱陶として憂虞に迫り之が爲め精神抑屈せられて深く無恨の悲哀を發し啻に一時の娯樂を得ざるのミならず尋常の愉快すら且つ之を得ると能ハずして一生を送らんとするの感覺を發するに因り遂に人情に違背せる思ひを發し他の幸福の己れに勝れる者を妬み自から受る所の悲哀を以て之を他人に分たんと欲するに至るべし蓋し婦女たる者自から省みずして其心を縱まゝにし一時の快を博せんと欲する如き事あれバ終に汚狀醜聲を漏すに至るなり

斯の如きハ下等人民の婦女に浸染せる生活上の陋習なり若し其子女の幼稚無識の時より此の不幸の俗に訓るゝと男子も亦從て此不幸を受くると考察すれば世人ハ必らず現今の情態に於て職工人及び其同等の社會に在て全たく此の害を受けずして善良なる者の甚はだ僅少なるハ實に大洋の一滴水の如きを知とあらん

已に前々より説述したるが如きハ婦女をして其目的を高尚ならしむべき龜鑑と爲に足らん。世の德義家に於てハ婦女の品行の未だ頽敗せざるに先だち其不良の風を去て實着儼肅の氣風たらしめんと企圖せし敎戒及び仁惠を施こす者鮮なしとせず然れども此不幸の存在するハ殆んど世界と共に不朽なるが如き者あり豈に痛嘆の至りならずや

現今下等人民の婦女ハ其手藝の爲に工作場及び問屋の傭役を受る者多し然れども善良の敎育よ從かひし高尚なる婦女ハ縱へ其手藝一家の生計を補助するよ足も之に從事するの不可なるとを知れり。夫れ下等人民の婦女の手藝に從事する所以の者ハ何ぞや果して艱難困苦已を得ざるに出るか余儕以爲く然らず其艱難困苦の如きハ固より之を救ふべきの道なきに非ず畢竟自己の無識と情欲とを以て之を招くのみ故に敎育世に普ねくして風俗の改まるに從て漸やく其困苦を脱するに至るべし然れども下等人民をして其困苦を脱せしむるが如きハ誠に容易の事業に非ず善良の政治と雖ども一令以て無識者を空しふすると能ハず又直に不德の民をして有德の民たらしむると能ハず唯だ順序を逐ひ漸を以て善に向ハしめ再たび不善に復せしめず終に無識者をして跡を絶しめんとを要そるを以て正

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

鵠と爲すべきのみ

今世人の語を聞に曰く下等人民に在ては良人工業の給料能く日用に供するに足ざるを以て其妻女も亦工業に從事せざるを得ず故に此事たるや啻に其良人の補助者たるのみならず妻女をして自分の倦怠の情を消せしめ且つ其家事に關せる不平心を消せしむるの良媒たりと

余儕は決して此の説を以て的切なりと信せざるなり夫れ人の妻よして工業場に入り未嫁の女子と同じく其家よ遠ざかるに至りては一家の爲にも社會の爲にも一大不幸と謂ざるを得ず

〔以下次號〕

◎歐米女學の枝折

○商客　〔承前〕

阿梅姐曰く妾は磁器商なり今手元に賣る所ろの茶器あり此の茶器は動物か將た植物か又は鑛物に屬する物なるか

阿松姐荅て曰く是は此れ鑛物よ屬するなり夫れ磁器は粘土と燧石と合せ之を粘て火に燒き造る物にして即はち土に屬する質なりとす又曰く今妾の順番來れり抑も妾は呉服商なり而して重に染し木綿を販賣せり是れ動植鑛三ツの內何れに屬するや

阿竹姐荅て曰く是は植物なり夫れ木綿は綿より成て之を器械に掛て糸となし而る後ち織なす物なり。妾は此れ蠟燭商なり其賣品の臘は動植鑛何れの物とするや

阿龜姐荅て曰く蠟は大抵左の原質より生する物なり即ち牛羊鹿山羊の脂及び蜜蜂鯨等の油を取て之を製せる物にして即ち彼の獸脂蜜蜂鯨の如きは動物なり。妾は桶商なり玆よ飯櫃あり是は動物か將た植鑛何れに屬するや

阿鶴姐曰く其飯櫃の大体はさはらを以て造れば植物なり而して其たがは赤銅又は眞鍮を以て造るが故に鑛物なり。妾は絹布商なり其賣る所ろの白縮緬は其質たる動植鑛何れの部分に在るや

阿菊姐荅て曰く即はち植物なりと。阿鶴姐之を聞て阿菊姐に向て曰く貴女は何故よ白縮緬を植物なりと云ひ給ふや縮緬は蠶の吐く處ろの糸より製造せし物に非ずや故に動物に屬すと申すべし貴女は已に其説明を謬まりたり因て其順番を奪ふ規則なれば貴女は此回の商客戯游に於て一物も賣ると能はず次席なる阿妻姐貴女進んで商賣を始め給ふべし

阿妻姐曰く妾は文房具を賣る商客なり玆よ紙一帖を有せり之

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を動物とせんか將た植物とせんか又ハ鑛物とせんか
阿糸姐荅て曰く是れ植物なり如何となれバ紙ハ楮又ハ三ッ又
西洋紙の如きハ藁及び綿爛布麻布等にて製すればなり。妾ハ
藥種商なり今鴉片を持てり此の鴉片の質たる動植鑛何れに屬
そべきや
阿道姐荅て曰く此物ハ鑛物なりと。時阿梅姐呼で曰く嗚呼阿
道姐ハ説明を誤まりたり如何となれば鴉片ハ植物に屬せり即
ち印度に產する罌粟の實の液汁を取て凝むる物なり貴女ハ
規則に由て商客となるの地位を奪ハれたり故に妾の所ろへ再
た商客となるの順番來れりと。時に阿道姐重て曰く妾の考へ
にてハ西洋藥種ハ多く鑛物に屬する物なりと思へり
局外なる阿春姐之を聞て諭して曰く凡そ藥種ハ其類多々にし
て數へ難しと雖ども之を大別すれば三種なり即ハち植物動物
鑛物とす鑛物ハ石膏銀液の類動物ハレーフルタラン。熊の膽
麝香の類植物ハ葛根杏仁其他種類最とも多けれバ鴉片ハ無論
植物なりとぞ

商客の遊戯大略以上の如し其商賣品に至りてハ種々變換
し以て之を問ば智識を博むるに於て大益あらんか

○御茶坊主

此慰みハ日本の御茶坊主に似て稍や高尙に進みたる遊戯なり
此を爲んにハ大勢列坐して一人ハ御茶臺を持ち他の人々ハ茶
臺に附屬する物品の名を銘々の名と定めて始むるなり茶臺よ
附屬する物品とハ則ハち茶々臺菓子茶盃菓子箸菓子器急須等
の如し而して此の遊戯を始むるに當りて茶臺を以て名とする
者片足にて室内を回り呼て曰く妾ハ茶を進上す誰の菓子を進
上するや時に菓子を以て名とせし者荅へて妾ハ菓子を進上す
誰の茶碗を進上すと自分の好める前記の名を呼ぶなり而して
若し自分が荅ふる順番に當りしとき其荅へが早からざるか又
ハ自分よ附きし名を忘れたる時ハ罰金を出すとす其例左の
如し
阿夏姐曰く阿秋姐ハ茶となるべし阿冬姐ハ茶碗となるべし阿
君姐ハ菓子阿常姐ハ菓子器阿富姐ハ茶盃阿増姐ハ菓子箸阿鈴
姐ハ急須妾ハ茶臺となるべしと是に於て各々を圓く坐ふす
阿秋姐ハ即ハち片足にて坐敷を回りて曰く妾ハ茶を進上す誰
か菓子を進上するや
阿君姐荅へて妾ハ菓子を進上そ誰か急須を進上す。阿鈴姐荅
へて妾ハ急須を進上そべし誰か菓子器を進上するや。阿常姐
曰く妾ハ菓子器を進らせん誰かありて茶盃を進ふすや。阿富

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

姐曰く妾ハ即ち茶盃を進上せん誰の菓子箸を進上するや。阿増姐曰く妾ハ菓子箸を進らすべし誰か茶碗を進上せんとするか。阿冬姐曰く妾ハ茶碗を進上せん誰の御茶を進らするや。阿秋姐曰く妾ハ茶を進上すべし誰か御茶臺を賜ハるべしと。時に茶臺の答へをする者なし阿秋姐又曰く誰が御茶臺を進上そるや嗚呼阿夏姐貴女ハ罰金を出し給ふべし貴女ハ御茶臺を忘れたりと

阿夏姐答ふ今妾ハ他の事を思ひ居て終に茶臺を忘れ罰金を出そ場合よ及べり妾ハ妾の所爲に於て何事も常に氣を附ざる可らず假令今の爲す所ろハ慰さみなれども之を實際の事とすればば實に損失およはひなり嗚呼妾ハ以來物忘れするヿを深く怖れんとそ即ハち此の女學叢誌第五號を差上て其罪を償なふべし

○西洋の謎

● 玆に捉ふべからずして取て證據となそべき物あり然も其名ありて常に形ちハ長短し又ハ正斜し常に人々の宴遊舞踏につれざち始終相離れず自からも亦舞踏せり　〔一〕

● 昨日既にあひたり而して又明日將に來らんとす　〔二〕

● 其生するハ唯だ嚴冬の日にあるのみ盛暑にハ必らず死亡す其生するや根を倒しまにして生る　〔三〕

● 余ハ風の吹き起るに隨て必らず動遙す然れども最大の重みある物を運轉して少しも疲勞を覺へず余の威力强勢よく此世界の缺け處ろを塞ぎ又ハ各物悉く混淆そるの大患を發生すると人の知る處ろなり然れども又其億兆人民を保護するの大功德を保てり　〔四〕

記者曰く西洋謎ハ嘗て御伽草に加へしと雖とも是れ尚ほ歐米女學に關し少女諸卿の智識を開誘そるに必用なれば以來本欄に加へぬ而して其解の如きハ直に之を付せずして讀者諸卿の考案に委し解當ハ之を次號に附せんとす冀くハ陸續解を投寄し給へかし

○數學のプッザルス

第一　二十五個ノ數ヲ二倍ニセシ者ト二倍シタル五個及ビ二十個トノ數ノ差異ハ如何

○答

第二　玆ニ靑魚一尾半アリ其價三尾ノ半錢ニ當ルトス然ラバ今十一錢ヲ以テ幾尾ノ靑魚ヲ得ルヤ

○答

第三　男子アリ昔日其妻ト婚姻ヲ結ビシ時其所天ノ歲其妻ヨリ多キヿ恰カモ三ノ數ニ三ノ同數ヲ乘シガ如ク三層倍ナリ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

トス其後十五年ヲ經テ依然トシテ釣合ヨキ夫婦タリ而シテ今妻ノ歳ノ所天ニ近キコ八ト十六ニ於ルガ如シ試ミニ問フ此夫婦ノ新婚セシトキ各々ノ年齡幾干ナルヤ

○答

◎和英語羅馬字對譯（いろは骨牌）

（和）（羅）	花より團子 Hana yori dango
（英）	The rice-cake is preffered to the flower. 團子ガ(一) ルヽ(五) 擇バ(四) マデ(三) 花ニ(二)
（和）（羅）	憎まれもの世にはびこる Nikumare mono yo ni habikoru.
（英）	The hated flourishes in the society. 惡マレモノ(一) ハビコル(四) 於テ(三) 社會ニ(二)
（和）（羅）	骨折ぞんのくたびれもふけ Honeori Zon no kutabire mōke.
（英）	Labour for nathing but fatigue. 骨折(三) 向テノ(二) 無一物ニ(一) 合併(四) 疲ビレ(五)

◎内外烈女傳

○司馬懿の妻

三國の時司馬懿天下を望むる志ざしあり遂に魏の武帝の命を快よしとせず病に托して家に横臥し參朝せず一日曝藉の虫干を爲しに暴雨俄かに來りけれバ司馬懿覺へず起て之を收めしに婢女之を見認ければ其妻張氏大に驚ろき手から婢を殺して其口を止め親から薪炊の勞を取しと云ふ

○細川忠興の夫人

巴の勇板額が膂力あるも唯面前の弱兵を挫擊そるに過さず國に殉ひ節に死して萬世の龜鑑となる者只だそれ細川忠興の夫人を以て最とすべき歟夫人ば明智光秀の女にして忠興に嫁す天資慧敏にして擧止温雅恒に宜く家人を撫そ此に慶長五年石田三成謀反の企わりしとき先つ諸侯の妻子を質として大阪本城へ留置きなは關東方へ心を傾ける諸將にも妻子の愛に惡されてよもや充分に關東方への味方はなし難かるへし左すれバ德川氏の孤立なる眼前に在とて第一着よ使者を細川忠興の邸に遣り謂しめて云ハく方今物情はなはだ穩やかならず今ょも變の起らんと計り難し故よ在府諸將の夫人幷びに公子とも本

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

城内へ之を避け給へは一ッには淀君及び秀頼公を安撫そるの媒介となり二ッには各方の安心なるべしと申し遣はしけるに夫人は篤と思慮され家の老職を以て之に荅へけるは今忠興軍に従がふて關東に在り臣等駑鈍と雖ども其留主を預かり夫人を保護して此邸に在り此邸や即はち本城よして忠興の訓令なき以上は一寸も離るゝと能はず御芳志の段は忝じけなしと雖ども右の事情に付きよろしく御酌量ありて淀君及び秀頼公御伽の儀は御免下さるべしと陳じて其使者を歸しけるが三成之を肯んぜず三たびまて促がしたるも絶て承引なかりければ今はとて則はち兵一隊を遣りて之を脅迫しけるに夫人は斯くあるべしと豫て期したるとなれば些

七十四

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

も騷のす徐むろに姑に向ひ今ま將に變起らんとす母人ハ御年長此の騷かしきを瀨く思へ給ふらめバ浮田家へ一まづ之を避け給へのしと甲斐々々しくも行裝を助け之を逃しめ次に侍女お霜を召して三成等卑怯にも兵を以て强んとす吾れ何ぞ姦賊の計とに乘ん只だ一死節を全たふするあるのミ汝ぢ此邸に火の起るを見バ速かに形を變此文を關東に持下り以て殿に致し吾が心さしを爲しめよ此使者を托すハ汝にあらで誰かあるとて遂に料紙硯を引よせ一章の文を認ため其奧に

先たつハおなじ限りの命にもまさりて惜き契りなりけり

お霜ハ此使者の命を聞て之を否み是非御先途に立まひらせんと泣口說けれども終に許されさりしかば心を鬼にして死別を告け目を泣はらしてぞ出ゆきぬ斯て夫人ハ老職河喜多石見小笠原松齋等を召び其身の覺悟を申し渡しける樣ハ〔以下次號〕

○表壽傳　〔五〕

○佛國のマリアスミッスの傳

野邊に籠子のふげて菜摘なる乙女子よして其友垣が臨終の遺言を諾なひ竟に當の敵を擊て修羅の妄執を晴させしハマリアスミッス女になんある西曆一千八百六十七年の頃のとよ佛國の片山里にリトリナと云ふ地のチヨンタブリーツチと云ふ者の女同し里なるマリアミッスと云ふ少女と常に睦ましく往來し假に姊と呼び妹と稱へ離れ難き中なりしが一日徒然を慰さめんと打連だちて後の山へ蕨とりに徃けるが頃ハ二月の眞中にて殘りの雪ハ消やらで那面此面の崖に斑らし春知り顏の鶯ハ谷の戶いでゝ初音を弄し最と興あるとなれバ吾を忘れて山深く立いり去らば此處にて蕨とらんと各々處を異にし頌歌を謳ひ話しものして他目も振らず摘けるうちジヨンの女ハ過つて殘れる雪に乘かけ噫やと見る間に二丈餘もある谷よ轉び落たりスミッスハ之を見るより痛く驚ろき救ハんとすれども降るべき路とてハなく如何せんと躊躇うち不圖一町ほど前よ下る處ろあるを思ひ出し風の如く裾を蹴りて走りゆき枯はてたる荊棘を分け葛羅に攀り辛くも谷の底に降り那處此處と雪を踏み徃れる時何處より谷の底に徘徊來りけん一疋の狼は早やヂヨンの女の肩先よ嚙つき肉を喰ひ取り更に片腕を嚙きらん勢なればヂヨンの女ハシヒ〳〵と苦痛の聲を揚て救ひを請ふ物凄き有樣を見るよりスミッスハ夢かと斗り驚せしが固より友愛深き女子なれバ吾身を忘れて雪に凍れる礫を拾ひ聲を限りに驅たてゝ其石を投じたれば狼ハ大に狂りてヂヨンの女を其儘にしスミッスを目かけて飛かゝるをスミッスハ手早く又

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

石を拾ひ眞向碎けよと投たりしに天此の義女を守護なし給ふにや狙ひ違ハず狼の額に中りたり是に於てスミッスハ其圖を外さず木の葉の如く石を投たりしに流石の狼も之に敵し難くや有せん暫し躊躇しが卽て獰惡なる紅なひの口を開き一聲高く哮しまゝ谷の奥へ逃入たり。スミッスハやれうれしやと走り寄りヂョンの女を見るに三ケ所の深手にて絶々なる息の下よりスミッスを詠めやりさも苦しげに云る樣今目の當り見給ふ通り彼の狼に重傷を負され迚も助かる可も覺へ侍らずスミッス姐に御身友刀自の誠を忘れず驅やられし情の程ハ忘れ難し尚ほ此世の思ひ出に彼の狼を打取て妾が恨みを晴し給へのしと最と可憫き有樣にスミッスハ途向の涙に暮しが斯ハ果じと雄々しくもヂョンの女を肩に掛け蹌踉ながら谷を上り辛ふじてヂョンの家へ送り込其父母に對面し斯々なりと爾々なりと有し次第を物語り且つ女に向ひて彌に御身の申されしとハ妾命にかけても果し侍らん程に必らず心に留め給ふべからずと云ふを聞き女ハ世にも嬉しげなる思もちし笑を含みしが又父母とスミッスを打見やり殊に愁れに死別を告け十七歳を一期として亡き人かずに入にけり

【以下次號】

○女學

○榊の辨

和名しきミと云る木を邦俗樒の字を用ふ。本草家ハ莽草に充つ果して是なりや予ハ物産に疎ければ當否ハ知らず今都鄙となく此木を必らず墳墓に供ふると天下一般の俗となれり此木佛家に因縁ある事法華經の第一卷にハ。或有起石廟栴檀及沈水木樒并餘材瓴泥土等。疏木樒者長安有木名樒任造像已上是乃栴檀沈香樒木等ハ清淨にして香氣ある故に佛像等を造り又佛前にも供すると見へたり。然るに宇治荒木田神主久老が萬葉考槻乃の落葉に弟子西村重波が疑がへるハ神樂歌に。榊葉の香平加倶波志美覓來れば八十氏人曾滿登比世利介流とあるに貫之の歌にも。おく霜に色もかハらぬ榊葉の香をやハ人のとめて來つらん（新古今集）源氏榊の卷にも。をとめ子があたりとおもへば榊葉の香をなつかしみ。とめてこそ來れ。とあれバ必ず葉に香氣あるべきに。橿も今の榊も美者々木も葉に香氣なければいにしへの賢木にハあらずやと云り是もひとつの考へなるべく思て今按を加ふるに和名抄新撰字鏡等に龍眼木の字を佐賀木に當たるハ叶りやあれじや。おはつのなけれ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

バそはおきて。いにしへ佐賀木といへるハ師の言の如く榮樹にて何にまれ常磐木を用ゆるが中にも。もはら神事公事に用ひしハ樒なるべくこそおぼゆれ。〔或人の云龍眼木ハから木也その葉香氣ありて形狀樒に似りと云り〕さるハ巻の廿に奥山乃志伎美が花乃とよみて。かならず深山に生るものなれば奥山乃賢木が枝云々といへるにもかなひ。和名抄に樒ハ香木也とありて其葉香氣あれば榊葉の香をかぐはしみと神樂歌につくるにもかなへり。さて是をしも佛に奉つるハ。元來神に奉るものなるを以て佛のわたり來し後に其をうつして佛にも献しが今ハもつぱら佛のものとのみなりゆきて神にハ他木を用ひしより樒ハ花とのみ呼て賢木の稱ハ失なへるものならんと思へりしに吾外宮神宮に十二月の晦の夜。小内人等花賢木が末爲つ多と申して玉串御門に〔内の玉垣の御門とも云ふ〕奉れる乎見れば樒にてそ有けれ。是を以ておもへば神武天皇の大御歌に伊智佐介伎未酒於朋鷄句塢とみよみましゝハ實賢木にて〔名和抄に於比佐加伎とある是にや比と美と通へる例多し〕美者々木といひ〔實のいと多かるものなり〕神宮に花賢木といへるハ樒を云なるべく〔しきみの花のとよみたればなり〕いにしへの榊ハもつぱら樒を用ひしならんとハおもひなりぬ〔秦ノ文樹がいふ丹後國にてハ神に奠るハ統て樒にて其をさかしばといふと云りまた或人伊豆國箱根の邊にても樒を用ゆと云り〕とあるハ一理あるに似たれども余山家の人の話せるを聞に樒ハ香氣ありて狼の忌嫌ふと甚だしければ新葬の地にハ必らず此木の枝を折り立て塚を發くの患ひを防くとのよし又葉を末として抹香と名づけ香火に用ゆるも此の故なりと。然らば元來佛經にも樒木ハ香氣ある故に佛像等を造るに相用ひ來れり又山家等にハ墓所に植をけば狼の害をさげる故に都鄙ともに今ハ此木を供するならん歟

附て又萬葉考槻の落葉に。一とせ越後國高田なる日吉の神社の社人猪股ノ茂吉がふると學せんとて。おのがもとにありつるをり。此の榊の事を云つるに茂吉がいへらく今神宮に用ひ給へる榊といふ木ハ越の國にハなき木なりと云り故己とひけるに然ば越の國にてハ何ぞの木を坂樹とハ云るぞと問に今此所にて美者々木と〔美者呉ともいふ〕いへるハ吾邦にて神事に用ひ來れる榊也といへり。是ぞ神武天皇の御製に伊智佐介幾。未酒於朋鷄句塢云々とみよみましゝなるべく。實の多ければ實榮樹といひしを今ハ美者々木とも美者呉とも訛れるものならんとおもへりしに本居氏の古事記傳に田中道麻呂が言をあげ

七十七

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

て榊の事を云るも全たく同しかりけり。とあるにて考ふれば陵の字をみさゝぎと訓せるも美者々木を種るよりの名なるべし〔善庵隨筆〕

記者案ずる以上今の樒を古への賢木となす說或ハ是ならん而して此樒の實ハ毒ありて人を殺そが故に後世賢木の稱を云す專ら西しきみ〔惡しき實〕の名をのみ負せしにやあらん貌倘ほ識者の考證を俟つ

○娘ハ息女の稱に非ず

何の頃よりしてか娘の字を息女に充たり是れ非と謂べし諺言長語に曰く娘字俗書古無當作孃今通爲婦人之稱予觀韓魏公安陽集公傳中云朱宮中稱郭公爲大娘劉妃爲小娘則皇家亦如斯稱之不獨民間　とあり是にて娘ハ息女を云にあらざるを知べし

○餅をかちんと云ふ事

普通の說に餅をかちんと云ふハ昔し旱魃の時土民等能因法師を賴みて歌を讀せけるに忽まちに雨ふれり土民よろこびゐ堪ず餅を搗て饗應けれバ能因之を歌賃と云しより餅をかちんと呼來れりと云り。此ハ金葉集に。範國朝臣に具して伊豫國へまかりたりけるに正月より三四月まで。いかにも雨のふらざりけれバなハしろもせで。よろづにいのりさハぎけれども。のなハざりければ守能因によみて一宮にまいらせて雨をいのれと申しければ

天の川苗代みづにせきくだせあまくたります神ならばかみ

神感ありて大雨ふりて三日三夜やまずとあり。之より出てかちんハ能因より云ひ出しなりと謬り傳へしならんかちんの事ハ元大内より出し詞にて惠命院僧正の海人藻芥に云ふ内裏仙洞にハ一切の食物に異名を附てめさる。酒ハ九こん。飯ハくご。餅ハかちん。味噌ハむし。鹽ハしろもの。と見へたり黑川道祐曰中古衰世時。着褐塵服者盛餅於圓曲器戴頭上而賣禁垣内内家女子呼褐塵而買之其後婦人直謂餅曰褐塵とあり是れ正しき出所なるべし

◎女紅

○つゝみの記

凡そ進物を紙にて包む事。高位の人ハ檀紙を用ひらるべし。大なる物を包むにハ大高だん紙小さき物ハ小高だん紙を用ゆ其次ハのりいれを用ゆ何れも紙一重ねに包むべし物によりて紙一重ねをつぎたる如くならべて包むべし

包みたる物を水引にて結ぶと白紅の水引を用ゆべし高位の人

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

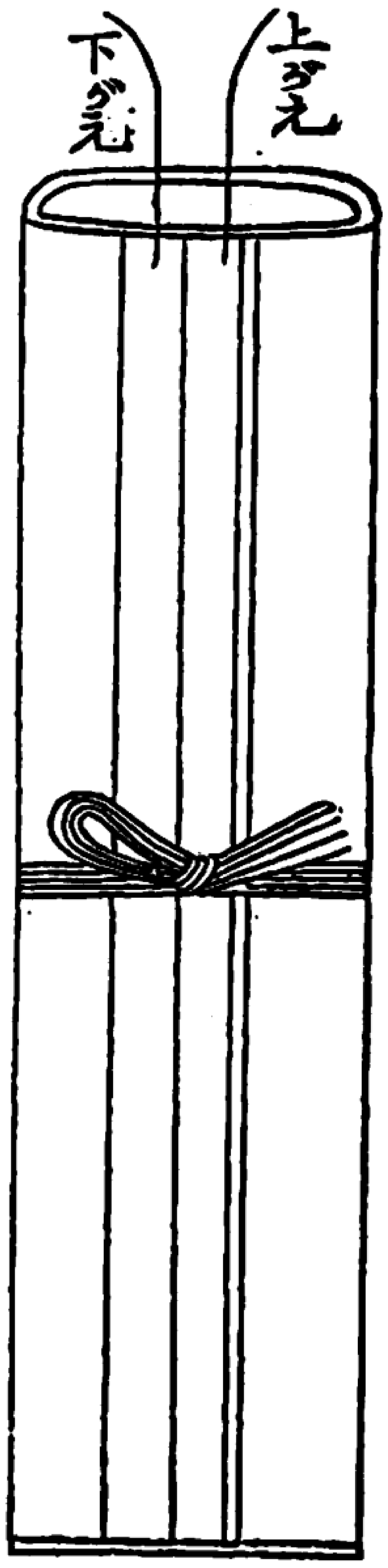
ハ金銀の水引をも用ふるべし。結び樣。丸き物をかたわなに結ぶべし。わなをば左になし端の方をば右よなすべし端を右の手に取り引とく爲なり。平たき物をば兩輪よ結ぶべし。丸き物ハ天の象にて陽なり。物のはしたなるハ陽なり。故に丸き物ハかた輪に結ぶなり。平き物ハ地の象にて陰なり。物のならびたるハ陰なり故に平たき物ハもろ輪に結ぶ是れ古へよりの傳なり

包たる物に其物の名を書付る事ハあしき事也包紙の內の物の名數いかほどゝ云ふ事ハ目錄に書なり其の爲の目錄なり

物を包むにハ其物の紙の外へ少し見ゆる樣に兩はしを出して包む物なり。何とも見えぬ樣に紙の內へ包み込とある可らず。其物の大小に隨かひて包紙を少し短かく折て包むべし。但し香などの類ハこぼるゝ物なるゆえ包み込べし。其外の進物ハ紙の外ハ端を出して直にそれと見ゆるゆえ上書するヿなし箱物などハ內の品みえざるゆゑ蓋の上にその內の物の名を書附るなり

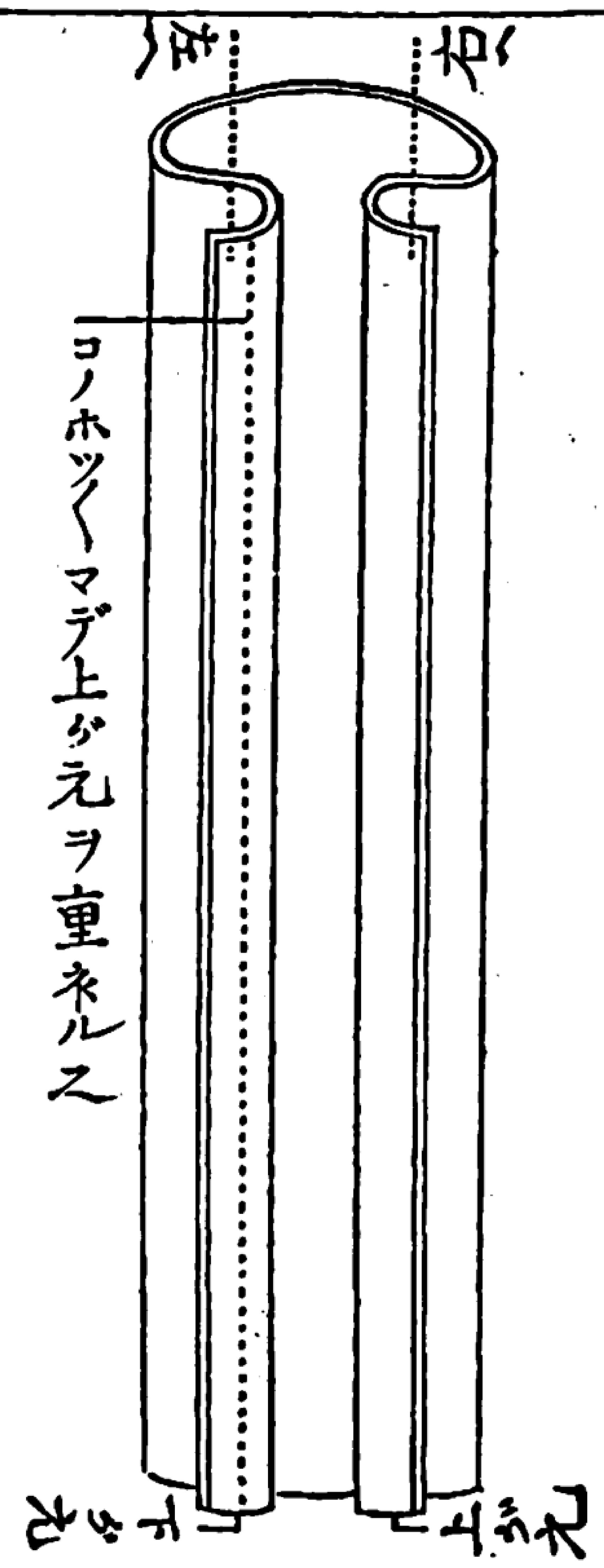
但し箱物の上書ハ必らず竪板に書き。横板に書とハすて札に限ると知べし

金らんどんす錦などの類。すべて丸く巻たる物ハ紙を竪に二つに折て。折めの方を左におして巻。真中にて紙の兩端を左右へ折かへすべし



○水引かたわなに結ぶ

右の包紙。真中を折かへし。上が元ハ狭く折。下が元ハひろく折て。其ひらきし上へ。上が元を重ぬれば。兩方同じせばさに見ゆる也。右の包紙ハひろけたる形左の如し



◎啼鳥　〔承前〕

○福嶋鳥

此の活潑よして且つ愛すべき福嶋鳥ハ一家族の住居毎よ畜養して心意を慰さむるに欠く可ふさる者なり

七十九

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

斯の如く雅美にして愛すべき小鳥ハ詩人が他の小鳥を評する時別して心を潜めて査究し又輕忽にもせし者にして從來温熱の國より輸入せしなれども今ハ全たく英國の風土ヨ慣て此に生産する迄ヨ至れり然れども唯だ家の内に畜養せらるゝのみにて決して山野に於て生ずる者あるとなし而して此鳥ハ今世上一般に行なハれ鳥籠を看る毎に此の稲鳴鳥の聲を聞ざるハなし凡そ稲鳴鳥の啼聲ハ甚だ愛らしき者にて且つ大概人の音聲を爲し或ハ囀づり或ハ嘯ふくに由て自在に之を馴して啼聲を變らしむるを得なり且つ此鳥ハ久しく默りて人の話しを聞に及びて忽まち起て囀唱の聲を發するに至る者往々之あり此時怠たらずして久しく發聲せる者なれバ其時籠の上へ手巾を掩ひて之を沈默せしむる方法を施すヨ至りたり（以下次號）

◎群芳詞苑

○緑竹契レ久　多比治、蘆野

ふし毎の八千代の數ハかそひせと君に捧くるよゝハ知られし

○郵便端書に祝詞を托すを見て　おなじく

ひらけゆく幸こそ思へはし書ヨ春のいてひをことつてゝくれ

○弟橘姫命　本郷　大松つま子

時しくの花たちはなハ綿津海にしつみて後も世にかをりけり

○隱士出レ山　おなじく

なのれてハ浮世ヨいつる眞清水をたヨの心ろや淺くみるらん

○隣　おなじく

隣をはなにかえふハん海人の子も木こる乙女も學ふ世なれは

○春與雜詠　根岸　中嶋ろく子

圓居してくむさかつきにうつしてん各もゝの心ろつくしを

○述懷　群馬　山田かふ子

天津神よさしのまゝの道々になとからたちのおひしけるらん

○紙鳶　丹治そで子

おほそらに時ゑ顔なるいかのほり風なみあしき世とハ知すや

○富士の山に日のかゝる繪を示して何れが大きやと問れたれば　三田みち子　十二年三ヶ月

天つ日にたくらべ見れハ富士の山いさごの中の砂子なりけり

○御伽草

○手取釜

此釜ハ粟田口善輔てふ者の所持せし名器なり袋ヨ鑄し歌に

手取かまをのれハ口かさし出たり雑水たくと人にかたるな

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

とあるより名とせり豐大閤深く之を愛し利久を以て之を請れしに善輔肯んせずして此釜あればこそ兎角もの云るゝも亦た思ひの外なりと遂に石に投じて毀ちければ大閤其志ざしを感じ勢州阿野の鑄物師越後に彼の手取釜二つを摸さしめ一を善輔に賜ひ一ハ御物とせらる善輔死して後ち其釜ハ粟田口の良恩寺に什物となれり細川玄旨法印も其形を愛て越後に摸さんとを請しに越後ハ之を辞し御所の思召にて二ツ鑄しを又同しく鑄ハ憚あり有と更に承諾なかりければ去ば此歌を鑄付よ同物になるまじと遂に鑄させたりとぞ

手取釜うぬか口よりさし出てこれハ僞じやと人に語るな

○近松門左衛門の美人の贊

樂天が意中の美人ハ夢のむつ言。僧正遍昭の詠中の戀ハ繪にかける女。とりかたにぞれかこれか。作磨云。物いハずわらはぬ代よりんきなく衣裳表具にものこのみせず

○大根

文盲なる大百姓大根を作らせけるが二三年思ふ樣よ出きざりしかバ大かた男どもの培養の惡きより然るならんと自から畑に出て土を堀てゐる所ろへ少作人通りかゝり。此ハ〳〵旦那樣男衆にふさせなさらいで御自身よなさるとハ○○○○かり（憚り」でごさりますと會釋すれバ。旦那ハ腹を立て己が大根を作るに葉ばかりとハ不屈なりと怒る所ろへ又一人來かゝりて是ハ旦那さまの御立腹ハ御尤とも。然しながら彼ハ何の分別なしよ申したので根も葉もないとで御坐ります

前後の思慮なき時ハ耻の上よ耻あらん

○風流

百花香をふく彌生の未つかた五六人づれにて日暮の里の寺院よ入り咲も遺さず散も初めぬ櫻をなのめ居しが一人の若人一と枝手折んとせしを和尚見咎てコリヤ〳〵なぜ櫻に手を掛るぞと叱りければ。ハテ左樣叱り給ふな「見てのみや人に語らん櫻ばな」と申す歌もあるでハ御坐りませぬか。イヤ〳〵埒もないとを云ふ人だ。入相の頃ハ鐘さへも搗せぬに

末語餘韻ふのし詩歌ともに此心ありたし

○堯舜ハ儒者か

田舍の儒者僅かに論語の講義くらゐ出來樣よありしかバ己はどの者ハ又と天下に在まじと獨り天狗で居し處ろへ或人來りて偖々先生の學問ハたいした者だ今の孔子で御坐ると云ば先生大きな顏をして堯舜

論語よみの論語しらずとハ此等をや謂べし

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

○あて字

手紙を披き見れバ柳日を借用申し度との文言にサァ此ハ譯がわからぬハと二三人評義して大方平生あて字を書く男もゑ是ハ朔日の日であらふと讀くだしても更に意義が解せぬゆゑ聞にやれば晦日のでりの字じや柳日が借用したひ

○家を圓く治める桶屋にての狂歌

桶屋の養母子常々不和にて養母ハ遂に養子を逐んとしければ或人仲裁に入りて讀る狂歌

木と竹とあはせる物ハ底が親たが何いはとまゝにして桶

◎机の塵

○世代の字

世代の字。唐の世に太宗の字世民の世字を諱て總て代の字に書き改めしよりして混同せしならん父子相繼曰世と云ひ兄弟不相爲後など云ば父子相繼ハ世と云べし兄弟相及ばゝ代と云べし世と云ふ可らずと

○昆布を祝物とする事　大松つま子投

我邦にて昆布を祝の物とせし事ハ昔し昆布をひろめと云し故なりひろとハ巾の廣きなりめとハ芽にてあら芽わか芽などの芽と同じひろめと云ハ物のひろぐる義を祝しなりと見へたり一說に中頃よりよろこぶと云ふ義に取直して用ひしとも云り

○庭の石燈籠　山田から子投

石尾筆記てふ書に利久へ路次の事を尋ねしに

松柏もみちぬからに塵つもるおく山里の秋そかなしき。と

答へたり又石燈籠を庭に置くとハ利久ある曉き鳥部野を通りたるに墓所の燈はのかに見へて殊に幽寂を覺へしより後ち石燈籠を庭に置て火を點し幽栖の觀に備へしなりとぞ

○書法一言

書ハ古人を學びて古人に其儘なるハ我物に非ずして假物あり故に法と意とを取て形の似ざるをよしとそ○字を書に大きさの揃ひたるハ俗なり大中小交りたるハ特に趣きを爲す者なり○文字を書うちハ呼吸をつめて書べし自然ら筆勢あらハるゝ者なり○書に各々の法あり左れども大字を書するか又ハ認たむる所に因て法の通りにならぬ場所あり其時ハ法を離れて書すべし然し守るべき法を心に存して書べし○總て書法の如くせんとせバ法に縛られて死字となり活字とならず故に心に法を會得せし上ハ法を忘れて書くべし之を有法に入て無法に歸すと云ふ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○飜譯の詩

陌頭楊柳枝の詩を飜譯すれば

路の邊りの青柳○はや春風が吹わいな○私しの心ろの切なるを思ふ殿子に知らせたや

斯の如くなりと而して青柳と云て枝と云ざるハ原詩の枝と云ふ字に心ろなく全たく附字なればなりと

○まゝ

生の母にあらざるをまゝ母と云ひ生の子にあらざるをまゝ子と云ふまゝハ養育の義にて今のまゝ母まゝ子の義ゑ非ず畢竟まゝハ小兒に乳を飲する乳母のとなり之を古へハ乳付と云ふ東鑑に武衛〔賴朝のと〕乳付の青女を召さる摩々と號すと又鄰女晤言ゑ也足軒の抄〔通勝卿〕にめのとをばまゝとをしなべてなづくる也とあるにて知べし是より轉稱してか今ハ小兒の喫飯するをまゝと云に至りたり

○靜流の薙刀

土佐坊堀川夜打の時靜御前薙刀を提けて敵を切伏されば後世其薙刀の象を靜象と云ひ其流を靜流といへど靜御前が夜打の敵を防きし事ハ義經記盛衰記にも見へず思ふに鍛冶譜ゑ濃州多藝郡志津鍛冶志津三郎兼氏後來相州爲正宗弟子能作長刀稱之世號志津象とあり是より附會して靜象と稱し倘は堀川夜打まで僞作せしにや

○定家卿十二月花鳥の歌

燈庵主袖下ゑ云ふ○十二月の花鳥の事定家卿其時の帝の勅にて花一ッ鳥一づゝ定光申さるゝなり其歌ハ

春三月やなき櫻にふじの花鶯きゞすひばりなくなり
夏三月卯の木たちばな撫子に山時鳥くゐな鵜のとり
秋三月さく女郎花はぎすゝき鷺のりがねに鶉なく也
冬三月のこる菊びわ梅の花つる鴫わたり千鳥おし鳥

花鳥の歌一首つゝありと雖ども此四首にて作りたる者ならん

◎つれ〳〵草講義

任天居士

順德院の禁中の事どもかゝせ給へるまゝも。おほやけのたてまつり物ハ。とろそかなるともてよしとすとこそ侍れ

●順德院　人皇八十四代後鳥羽院第三皇子●かゝせ給へる禁秘抄一巻あり●おほやけのたてまつりもの　天子に棒け奉るもの也公の字おほやけと訓

〔三段〕萬にいみじくとも色このまさらん男ハい

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

とさう〳〵しく玉の巵の底なき心ちそすべき。露霜にしほたれて。所定めずまどひありき。親のいさめ世のそしりをつゝむに心のいとまなく。あふさきるさに思ひみだれ。さるハ獨ねがちにまどろむ夜なきこそおかしけれ。さりとてひたつらたハれたるかたにハあらで女にたやすからず思ハれんこそあらまほしかるべきわざなれ

●色このまざらん男　此ハ古今の序の猛き武士の心を和らげ目に見へぬ鬼神をもあハれと思ハせの反對の辞にして優にやさしうらぬ男ハ情を知らぬと云の意に取べし決して女色と思ひ給ハぞ●さう〴〵しく騒々しく即ハち情を知らぬなり●玉の巵の底なき　巵玉無當桂華無實　當底なり●しはされ俗のいくぢなき意●あふさきるさ　徃さま來さま也此方彼方に思ひ乱るゝなり。八雲抄に。とそる。のくするも。とあり　しとりとてとすればかゝりかくすればあふいひしらすあふさきるさに●おかしけれ　やさしき心賞美の辞なり●ひたすら　只箇なり●たハれ　放蕩なり

◎内外雑報

○外國の女官　今度我邦へ來遊せし和蘭國皇后の宮の女官ハロテス、ヌシング、ハッハ子ハ願の上同國公使夫妻同伴にて去ぬる四日午後二時赤坂假皇宮へ參内し皇后宮の内謁見を賜ハりたりて外國女官の參朝ハこれぞはじめとやまうそべし

○婦人の電信技手　電信局各分局の内一二等分局ハ通信の數甚だ多く從ひて人員を要するとも亦多しと雖も邊土僻陬に在る三等小分局に至りてハ通信數甚だ僅少なるも尚二名の技手を在勤せしめざるを得ず然るに技手にして妻女を携帶して任地にあるもの稍々多數なるを以て是等妻女に通信技術を傳習せしめ成業の者ハ之を擧て助手となし夫妻をして分局に在勤し通信に從事せしむるの法を設くるときハ其の便尠からざるを以て工部卿の許可を得て此旨を各技手に諭告し妻女にして志願の者ハ其夫勤務の餘暇を以て之に技術を傳習せしむることに定めたり數月にして志願者多數に及びたるを以て本年八月各地に試驗委員を派遣し之を試驗せしめしに志願者六十四名の内及第せしもの二十六名あり依りて之に技術助手を命じ且本月中に於て分局在勤を命じたるもの十二名あり其餘も相續きて在勤を命せんとす　（以上二件本年一月四日官報）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

華族女學校總裁下田歌子先生訓歌
任天田嶋象二著編

貴女至寶 大全女用文姫鏡

木版大本全二冊 精彫圖畫彩色入 正價金六十五錢

此書ハ上卷に両皇后の宮の御尊影を掲げ奉り次に婦人品位の繪畫名所圖書三十六烈女圖傳百人一首女禮式を始めとして敎育編化粧の卷歌學裁縫學苟くも女學女紅に關係ある者ハ漏さず之を網羅し其件數百に達し且つ悉く之に繪畫を挿入し下卷よハ新体の女用文幷よ熟語を毎文章の末段に塡めて以て作文に容易ならしめ贅頭にハ貴女諸卿が坐右に於て日用欠く可らざる家事經濟編より育兒法まで掲けたれバ實よ數百冊の女學女紅書を兼有する近世無双の女子寶典よして眞に日本女鏡に背かさる良書なり冀くば購讀して廣告文の誣言よあらさるを知り給ふべし

且ツ愛讀諸君の便を圖り豫約低價法に倣ひ特別非常の廉價を以て十九年三月十五日迄貳千五百部を限り廣發賣せんとす尤御購求の多少を論せず出板せしものなれハ御送金の順序を以て御送本可仕候

東京日本橋區西河岸町十二番地畏三堂書肆
須原鐵二

○**歐米女權** 中村敬宇先生序 湯目北水先生編纂 全壹冊 定價三十錢 郵便税四錢

○**清國漫遊誌** 成嶋栁北先生序 副島種臣先生閲 曾根俊虎著 正價金四拾五錢 郵税自便

○**婦女庭訓の眞鏡** 東條竹翠著 繪入かなつき 全壹冊 定價三十錢 郵便税四錢

○**女子作文楷梯** 七條峯太郎編輯 女子必携 鼇頭作文要用字類 和製中本全壹冊 定價金貳拾貳錢 郵便税四錢

○**明治流行うそ八百** 滑稽新話
此書ハ能く明治の人情を穿ちたる奇にして妙と云ハさるを得さる滑稽本なり下編ハ上編より一層の珍奇あり
壹冊正價二十錢 郵税四錢

○**忠經旁釋** 漢馬融撰 日本佐藤楳先生旁釋 木板手刷 正價拾錢 郵税四錢

○**明治英名傳** 正價金三十錢 郵税共

○**人間長壽法** 人命保険
右ハ表題の如く人間の長壽する法なり藥を呑んで寢てゐる事と早や死にする事の御嫌ひの方ハ求め賜へ
正價郵税共三拾錢

○**東京高名鑑**
此書ハ府會議員、區會議員、新聞記者、演說者、詩文書畫の先生、代言人、等を掲載したる重寶の本なり
正價二十五錢 郵税共

○**古今百馬鹿** 正價金二十錢 郵税金四錢

○**滑稽水掛論**
此書ハ世に四國屋猿松、百内屋扳作、大破家三太郎、惣領の甚六なる四者あり互に議論百出共一議一論實に笑を止むる事を知らざる滑稽本なり
正價金拾八錢 郵税金四錢

一右書籍の外逐次出板書籍廣告仕候間續々御注文を乞ふ

○**小學徒手體操新書** 千葉師範學校體操敎師馬場壽先生著 訂正増補 第二版 美本全一冊 定價八錢 郵税二錢

○**啞鈴體操新法** 馬場壽先生著 美本全一冊 定價金十錢 郵税金二錢

○**美容術** 馬場壽先生著 小學生徒 全一冊定價金六錢郵税二錢

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

農學士菊地熊太郎編述

○化學理論一班　全一册

定價金二十錢
郵便稅金六錢

嶋津倉治編輯

○明治新刻 日本温古類聚　全壹册

定價金三十錢
郵便稅金六錢

小池民次序
馬場壽著

新撰 小學遊戲書　全一册

洋本仕立小本 挿密圖
定價金拾五錢郵稅金四錢

千葉本町壹丁目
立眞本舍

東京大賣捌所
績文舍

新版豫約廣告

米國パーリー氏原著　戸代光大先生譯述
容易 獨修 萬國史直譯

亞細亞亞非利加之部全備　一册

西洋綴紙數凡二百余ページ〇定價四拾錢

豫約特別廉價廿貳錢

(豫約期後賣價三拾錢)至急三千部豫約來十九年一月廿五日
出版豫約申込來十九年一月廿日限歐羅巴以下來十九年二月ヨリ着手

本書ハ方今江湖ニ流布セル直譯或ハ獨案内ノ譯字ニ番號ヲ附シタル迂遠繁雜ノ弊アル類ニ非ズシテ至便有益ノ方法ヲ以テ譯述シタル者ナレバ讀者ヲシテ英學獨修ノ便ヲ感セシムル夥多ナルベシト確信ス請フ英學篤志ノ諸彥一閲シテ此書ノ容易獨修ノ名ニ背カザルヲ知ル處アレ
御禮の爲廉價發賣

西村茂樹先生撰
新撰百人一首　一册

右物彩色近古無双美本特別直引價九拾錢
黑摺(無彩色)美本特別直引價四拾五錢
ハ先年出版以來愛顧諸彥ガ近古無双ノ美本トシテ陸續御購求被下數千部賣捌候ニ付御禮ノ爲本月廿日ヨリ來一月廿日迄前記非常ノ廉價ニテ賣捌候間御購求可被下候

東京本町二丁目 中外堂
千葉本町 立眞本舍

弊舍ハ數十年來活版印刷と書籍出板とを兼業罷在り因て他店の書籍と雖とも御注文有之ときハ其店にて賣る價を(割引ある品ハ其店の割引の通り)以て御取次仕候尤無手數料なり又女學叢誌御愛看諸君に限り東京府下千葉縣下出板書籍御購求上にて御尋有之節ハ郵券二錢御遣わらば諸店問合の上懇切に御回答申上候也

東京々橋區南鍋町貳丁目拾壹番地

續文舍書籍掛敬白

東京々橋區南鍋町貳丁目拾壹番地
發行所　績文舍

持主兼印刷人　松本義弘
編輯人　山田常治

女學叢誌賣捌所

東京芝區愛宕町一丁目三番地　大賣捌所　修正堂
同　神田區淡路町　同　巖々堂
同　神田區雉子町　國々社
同　日本橋區新𢰤町　良明堂
同　牛込肴町十七番地　活神堂
同　芝區愛宕下町二丁目　高槻堂
同　蠣売町貳丁目　信文堂
同　本鄕區本鄕元富士町二番地　盛春堂閣田
同　同　本鄕春木町貳丁目　解明堂
大坂府備後町四丁目　岡嶋支店
千葉縣千葉本町一丁目　立眞舍
上總國武射郡松尾　高林銀藏
江州彥根西内大工町　新々堂
勢州津京口町　郁文堂
陸前國仙台大町四丁目　木村文助

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY